

吉川允二賞受賞者 への祝辞

2025年3月5日

核融合エネルギーフォーラム

運営会議議長

佐和隆光

1. 核融合科学研究所の前山伸也様には、この度の吉川允二記念核融合エネルギー奨励賞における優秀賞ご受賞、また九州大学の小菅佑輔様、大阪大学の沖田隆文様には奨励賞のご受賞、まことにおめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。
2. 核融合エネルギー研究の分野では最も栄えある吉川賞を受賞なさった前山様、小菅様、沖田様の、日頃の絶え間なき研鑽と、持ち前のクリエイティビティに対し、頭の下がる思いがすると同時に、拍手喝采をお送りいたします。
3. 今や、核融合という言葉が、脱炭素ブームの到来と相まって、政治家や経営者の口の端にのぼせられるようになり、核融合は、遠からず、来るべき脱炭素社会における電力供給の切り札となるかのような気配であります。

4. 果たしていつ頃、核融合が新たな電源として実用化されるのかと問われると、その答えは、10年前も20年前も、いつでも「25年先」だったのです。
5. ところが、最近になって、核融合を巡る環境に画期的とも言うべき変化が起こりつつあります。アメリカのビッグテックが核融合の研究開発に巨額の投資をするようになり、核融合に関わるスタートアップが雨後の筍のごとく繁茂するようになりつつあります。
6. なぜそうなのかということ、生成AIの登場などによる電力需要の急増に対処するために、高出力の脱炭素電源が、近い将来、必要にして不可欠となるからであります。
7. それゆえ、「核融合の実用化はいつ頃か」との設問に対する答えも「25年先」どころか「2030年代」へと変貌いたしました。

8. 2030年代という、本日受賞された3名の方々が、日本の、否、世界の核融合研究開発の中核に位置されていることでしよう。
9. 過去の核融合研究開発は官主導でしたが、今後は、官と民が役割分担しての研究開発が進捗することになるでしょう。また、国際競争も熾烈になることが予想されます。
10. 本日ご受賞なされた3名の研究者に加え、本日、オンラインにてご参集の研究者、とりわけ若手の方々には、こうした世間の要望に応えるべく、画期的な研究業績を通じて、核融合発電の早期実現へ向けて、一石そして二石を投じられることを願ってやみません。
11. 本日は、誠におめでとうございました。